

2. 研究成果

A. 計画研究

課 題 1

計画：1-1

滋賀県日野町における野生ニホンザル集団の行動と地域住民に関する調査

中道正之・今川真治・待田昌二
(大阪大・人間科学)

滋賀県日野町に生息する野生ニホンザル集団に関する調査が行われた。すでに、日野町には3集団(日野A, B, C集団)が生息していることがこれまでの調査で把握されており、今年は、個体数や遊動域のより正確な把握、そして、地元住民のサルへの対応も調べることを目的として行われた。

集団が山間部の谷や道をわたったときに、ビデオカメラで撮影し、その分析からほぼ正確な個体数が日野A集団では把握することができた。成体オス12, 成体メス49を含む約135頭からなる集団で、野生ニホンザル集団としては、かなり大型集団であるといえる。他の2集団については、ビデオカメラによる撮影には成功しなかったが、複数回のカウントからB集団が約80頭、C集団が約50頭の個体数であることが把握できた。これまでの調査では、A集団とB集団は行動域が隣接していることがわかっていたが、さらにA集団とC集団でも一部行動域が隣接しており、かつ稀には、両集団が100メートルぐらいの距離で採食することがあることもわかった。

3集団とも、民家や田畑に隣接した比較的低い「里山」を主たる行動域としているため、猿害問題を引き起こしている。その多くは稲と民家近くの畑の野菜である。秋の稲が実った時期には、山に隣接した田に集団が出てきて、稲に被害を与えている。我々は、地元住民との話合いの中で、サルを田から追い出すだけでなく、山の中まで人が入って追うことを求めた。それを実行した一部の地区の住民の中には、猿害防止効果を認める者もいた。しかし、冬季に落ち穂拾いに田に出てくるサルには追い払いは行われず、サルにとっては冬季の重要な食料源になっていると考えられ、また、これが秋の稲の収穫時期の猿害を加速していると

も思われる。

日野町のような「里山」に生息する野生ニホンザルの調査に従事する者にとっては、サルの行動や生態の調査だけでなく、サルに対する地元住民の関心や対応も併せて調査し、サルと人の共存の方策を見つけ出す努力が今後ますます重要になると思われる。

計画：1-2

北陸と東北北部におけるニホンザルの分布変遷の比較研究

三戸幸久(日本モンキーセンター)

これまでの研究で、東北地方北部のニホンザルの分布縮小の原因が、江戸時代の冷害飢饉による狩猟依存体質を歴史的背景に持った、明治以降の近代化に伴う狩猟圧だったことを明らかにした。本研究では隣接する日本海側の北陸二県(山形県、新潟県)でニホンザルの分布が過去どの様に変遷したのかを調べ、東北北部との違いを考察した。

北陸二県の現在の分布は、青森、岩手、秋田の東北三県のそれよりも多い。大正12年の調査は「二十年前棲息セシヤノ説アルモ目下其事実ヲ認メス」(山形県西置賜郡)、「往昔多ク棲息一現今全ク其影ヲ認メ」ず(新潟県東蒲原郡)など他2郡の生息減少を伝えており、明治期に狩猟が盛んに行なわれ、分布の縮小したことがうかがえる。しかし昭和の調査(S.28岸田, S.39竹下)と1978年の環境庁調査および今回の調査結果を併せると、明治～昭和30年代まで分布域の郡単位での絶滅はほとんどなく、孤立化はしているものの各地で群れの生息が確認されている。絶滅を確認した郡は新潟県刈羽郡のみであった。刈羽郡の柏崎市鞆川折居の古老(80歳)によれば「サルは明治から大正にかけて鉄砲で撃って食べていなくなった」と語っており、また大正以前に消滅した新潟県中魚沼郡秋山郷でも古老(80歳)によれば「周辺では昭和22年ごろまでサルをとっていた。昭和10年位まではほとんどの家には銃があった。」と語った。また、南魚沼郡志(大正9年)にも「明治維新後食肉と毛皮の需要激増せるに連れ盛に獵獲せられ今は絶滅に歸したるものも少なからず」と記しており、この両県においても減少の原因は狩猟によるものであることが判明した。

では、なぜ北陸では東北北部とは異なり、ニホ